

釜石まつり 《昔ものがたり》

10月16・17日に行われた釜石まつり。天候にも恵まれ盛大に開催されましたが、特集を組むにあたり、資料を調べていくと、知らない事が次から次と出てきました。

例えば【釜石まつり】は尾崎神社例大祭と新日鐵釜石山神社例大祭の合同祭である事をご存知でしたか？

現在のような合同祭の形式は、釜石市制30周年を迎えた昭和42年からで、それ以前は個々のお宮で別々に行なわれていたのです。

となると合同祭となる以前の尾崎神社例大祭と新日鐵釜石山神社例大祭はどのような様子だったかが気になり、これは直接伺った方が良いと思い、取材に伺ってきました。まずは尾崎神社へ向かいます。



尾崎神社里宮

尾崎神社の里宮は現在、浜町の高台にその社殿を構えています。かつて門前町と言われた浜町2丁目付近の尾崎神社参道入口から坂道を登る事10分弱。結構きつい坂道で歩いて登ると良い運動になりましたよ。

到着後、宮司さんにお話を伺う前に境内をちよつと散策しつつ、息を整えて・・・。

【スタッフ】今回釜石まつりについて色々調べていたところ、現在の釜石まつりは尾崎神社と新日鐵釜石山神社との合同例大祭という形で行われているという事ですがそれ以前の尾崎神社例大祭はどんな様子だったのかお伺いしたいのですが。

【宮司さん】なるほど。

【スタッフ】まず祭りの由来についてお聞きしたいのですが。

【宮司さん】今から三百年前（西暦千七百年・元禄十二年）にはすでに行なわれていたようですよ。【スタッフ】どのような祭りだったのでしょうか。

【宮司さん】形式は現在と同じだったと思いますよ。

一日目宵宮祭・直会（なおりい）二日目曳舟・例祭・直会（なおりい）三日目神輿渡御祭・直会（なおりい）

【スタッフ】直会（なおりい）って・・・。

【宮司さん】神事に参加した方々が一緒に酒や食事を行なう事です。分かりやすく言うと飲み会ですね。

それから、もともと尾崎神社は尾崎半島に奥の院・奥宮・本宮があり、漁師や航海者の海上安全の神様として祭られておりました。

その当時の釜石は小さな漁村だったと思いますが、この頃から人口も増え始め、湾をはさんで向こう岸にある尾崎神社本宮を望む「遥拝殿（ようはいでん）」を当時は

場所前と言いましたが、現在の浜町・市営ビルの建っている場所に里宮として御寄進頂きました。

尾崎神社のご神体は普段奥の院にある為、里宮までお連れしなくてはなりません。そこで二日目の曳舟で御神輿を船に乗せお迎えに行きます。三日目で市内渡御を行います。ご神体を奥の院にお返しに行きます。

二つの御神輿



市内渡御に用いられる御神輿

ところで尾崎神社には二基の御神輿があるのをご存知でしょうか？曳舟の時に使われる御神輿と市内渡御に使われる御神輿は別の物なんです。私も今回宮司さんに教えて頂きました。

一基は三百年前に寄進されたものです。こちらは奈良の法隆寺にある夢殿を写し取った形をしておりこのような姿の御神輿は全国に三基のみと貴重なものです。もう一基は船に乗せるため前述のものより少し小ぶりです。



海上渡御に用いられる御神輿

【スタッフ】そうか。だから行列の時に見る御神輿がここにあるんですね。

【宮司】そういうことになります。【スタッフ】ところで、尾崎神社に祭られている神様は。

【宮司さん】ご神体は二体です。

日本武尊（ヤマトタケルノミコト）と閉伊頼基（へいよりもと）です。【スタッフ】その閉伊頼基が虎舞の起源と関わっていると聞いたのですが。

【宮司】閉伊頼基（へいよりもと）は、平安時代末期の武將、源為朝（みなもとのためとも）別名、鎮西八郎為朝（ちんぜいはちろうためとも）とも呼ばれるましたが、その方の三男にあたる方です。判りやすく言えば、源頼朝と義経の叔父さんにあたります。

閉伊頼基

この方が鎌倉幕府より気仙郡・閉伊郡を治めるよう言い付かり、伊豆よりこの地に来る際七人の部下を連れてきたそうで、その中の一人が舞った踊りが虎舞のルーツという説があるそうです。

閉伊頼基が尾崎神社に祭られているのは、この方が日本武尊（ヤマトタケルノミコト）をとても崇拝しており、亡くなられた時「日本武尊（ヤマトタケルノミコト）の剣の下に埋葬してほしい」という遺言により奥の院の剣の下に埋葬された事からだそうです。

お話を伺った後、宮司さんに境内を案内して頂きました。境内にある剣の後ろにはイチヨウの木があるのをご存知ですか？

イチヨウが色づくくと鐵の剣が見事な黄金色の剣に変わると宮司さんに教えて頂きました。

今頃黄金の剣が現れている事でしょう。

普段はなかなか聞く事が出来ない面白いお話を聞かせて頂きました。お忙しいところありがとうございました。